第三章　学校の時間！

アボンリーでは学校は秋、9月に始まります。
初日は皆、わくわくしています。
授業は8時半に始まります。
アンは学校が気に入り、他の女の子たちと友達になります。
でもアンは先生が好きではありません、フィリップス先生です。
フィリップス先生は白髪で眼鏡を掛けた、年配の男性です。
彼は気さくではありません。
ある日、新しい男の子が学校へやってきます。
彼は背が高く、茶色の髪と茶色の目をしています。
女の子は皆、彼のことが好きです。
「あの新しい男の子って誰なの？」
アンはダイアナに尋ねます。
「彼はギルバート・ブライスよ、アボンリー出身なの」とダイアナは言います。
「彼は気さくな男の子よ」
アンの机はギルバートの机のそばです。
ギルバートはちょくちょくアンのことを見ますが、アンは彼のことを見ません。
アンはギルバートに興味がないのです。
ある日、ギルバートはアンの長い髪を手につかんで言います、「ニンジン！　ニンジン！」
そして彼は大きな声で笑います。
アンはギルバートを見て、とても怒っています。
「あんたなんか大っ嫌い、ギルバート！」
アンは自分の石板を取ると、それでギルバートの頭を叩きます。
石板は壊れ、かけらが床に落ちます。
クラスの皆が驚いています。
フィリップス先生が「アン・シャーリー、君は何をしている？」と叫びます。
「アンはちょっと怒ってるんです、というのも…」とギルバートは言いますが、彼は言い終えることができません。
「アン、教室の前へ行って立っていなさい、一言もしゃべってはいけません！」とフィリップス先生は怒って言います。
アンは午後の間ずっと教室の前に立っています。
皆がアンのことを見ますが、アンは誰にも目を向けません。
「私は二度とギルバートとは話したくない」とアンは思います。
「彼はひどい男の子よ！」
放課後、ギルバートはアンに話しかけようとします。
「ごめんよ、アン、本当に！」
でもアンは彼に目を向けず、ダイアナと家へ向かいます。

「ギルバートに腹を立てないで」とダイアナは言います。
「彼は悪い男の子じゃないのよ。彼は私の髪のことだっていつも笑うのよ、黒いからって」
「私は私の髪についてのあの言葉が忘れられないの」とアンは悲しそうに言います。
アンとギルバートはお互いに口を利きませんが、彼らはクラスで最も優秀な生徒です。
ある土曜日、マリラが「私は今日の午後、町へ行かなければならないの。あなたはお茶とケーキにダイアナをここへ招待していいわよ。イチゴとサクランボがテーブルの上にいくらかあるわ。それと台所にはフルーツジュースが入った瓶があるわよ」と言います。
「チョコレートビスケットはある？」とアンが尋ねます。
「いいえ、一つもないわね」とマリラは言います。
「でも大きなチョコレートケーキがあるわ」
「すごい！」とアンは喜んで言います。
「ありがとう、マリラ！　大好きよ！」
「私もあなたが大好きよ、アン」とマリラは彼女にほほ笑みながら言います。
「あなたはいい子よ！」
アンとダイアナはお日さまの中、庭で遊び、素晴らしい時間を過ごします。
「私、喉が渇いたわ」とダイアナが言います。
「それに私はおなかがすいちゃった」とアンは言います。
彼女たちはそろって笑います。
「中へ入ってお茶とケーキにしましょう。イチゴとサクランボもあるわよ」
二人は居間でお茶を飲みます。
アンは台所へ、フルーツジュースの瓶を取りに行きます。
テーブルには瓶が 2 本あります。
アンは冷えたリンゴジュースの大きな瓶を取ります。
ダイアナはとても喉が渇いていたので、あっという間に冷えたリンゴジュースを 3 杯飲みます。
3 杯目の後、ダイアナは「あらどうしましょう、気分がよくないわ。お家に帰りたい」と言います。
「どうしたの、ダイアナ？」とアンは心配して尋ねます。
「分からないわ、アン」とダイアナは言います。
「ごめんね、でもおうちに帰らなきゃ…」
月曜日に、アンは本を届けるためにリンド夫人の家へ行きます。
でもアンは泣きながら帰ってきます。
「なぜ泣いているの、アン？」とマリラが尋ねます。
「どうか私に教えてちょうだい」
「ああ、マリラ、何かひどいことなの」とアンは泣きながら言います。
「ダイアナのお母さんが私のことをすごく怒っているの。彼女はダイアナが土曜日に病気だったって言うのよ！」
「病気ですって？」とマリラが言います。

マリラは少しの間考えてから、「まあ何てこと、今思い出したわ。それは私の過ちよ！　台所のテーブルの 2 本の瓶。一つはとっても冷えたリンゴジュースで、もう一つがフルーツジュースだったのよ！　暑い日に冷えたリンゴジュースを飲むと、具合が悪くなることがあるの。本当にごめんなさい、アン」と言います。
マリラはコートと帽子を身に着け、ダイアナのお母さん、バリー夫人に会いに行きます。
マリラは全てを説明しようとしますが、バリー夫人はマリラの言うことに耳を傾けません。
「アンは悪い子ですね」とバリー夫人は言います。
「それとアンはもうダイアナと遊んではいけません！」
マリラは家へ帰ると、アンにバリー夫人のことを話します。
アンはダイアナのことがとても好きなので悲しくなります。
今はもう、アンはダイアナと遊ぶことができません。